



政府の支援回復プログラムに住みオピオイドの錠剤を手にする男性。(写真/ David Tesinsky/ZUMA Wire/共同通信イメージズ)

「オキシコンチンは処方薬のため、日常的に医者にかかる人でないと処方がされません。4000万人以上の無保険制度の問題があるという。

「そうしたオピオイドは依存性も非常に高いため、オーバードーズによる死者も多く発生。心身の離脱症状も激しいので、入手の手段を選ばずに犯罪に手を染める人も増えていました」(神保氏)

また依存症の多くが白人だったことと、経済的に苦しい内陸部から被害が拡大したことでも近年のオピオイド危機の特徴だった。その背景には、米国の医療保険制度の問題があるという。

「オキシコンチンは処方薬のため、日常的に医者にかかる人でないと処方がされません。4000万人以上の無保険制度の問題があるという。

「オキシコンチンは处方薬のため、日常的に医者にかかる人でないと処方がされません。4000万人以上の無保

陥者がいた米国では、無保険で所得の低い人たち、そもそもオキシコンチンの処方と縁がなかったわけです。そしてオキシコンチンを販売するペーデュー・ファーマは、65歳以上の人対象の『メディケア』、低所得者向けの『メディケイド』といった公的保険の対象者が多く住むエリアを狙い、営業戦略を打ち立てました」(神保氏)

「いわゆるラスト・ベルト(さびついた工業地帯)やバイブル・ベルトと呼ばれる工場で、かつては鉄鋼や自動車、炭鉱などの産業で栄えた地域です。そうした地域では労働組合もしっかりとしていいるため、公的保険の加入者が多く、肉体労働で膝や腰を痛めた人も多い。ペーデュー・ファーマは、そうしたエリアの医師に接待等を行い、オキシコンチンを積極処方させ、患者を依存症にして利益を伸ばしていました」(神保氏)

「オキシコンチンは薬の成分が少しずつ・長時間放出される緩慢作用の特殊なコートイングにより、服用後は12時間ほど鎮痛効果が持続する点が最大のセールスポイントでした。ただ、内部の成分に強い依存性がある点は変わらず、成分の濃度は従来の鎮痛剤より遙かに高いものでした。そこで米国では、その錠剤を碎いて鼻から吸ったり、蒸留水で溶かして自分で血管に注射したりする人が出てきたわけです。ドラッグに関しては、どのようなノウハウが存在し、実際に器具も出回っていた点は、日本にはない特徴でしょう」(神保氏)

## 政府のキャンペーンで誤った安全神話が拡大

「オキシコンチンは薬の成分が少しずつ・長時間放出される緩慢作用の特殊なコートイングにより、服用後は12時間ほど鎮痛効果が持続する点が最大のセールスポイントでした。ただ、内部の成分に強い依存性がある点は変わらず、成分の濃度は従来の鎮痛剤より遙かに高いものでした。そこで米国では、その錠剤を碎いて鼻から吸ったり、蒸留水で溶かして自分で血管に注射したりする人が出てきたわけです。ドラッグに関しては、どのようなノウハウが存在し、実際に器具も出回っていた点は、日本にはない特徴でしょう」(神保氏)

「米国では学校で行われるスポーツもオピオイドが処方されていました。そしてオピオイドの依存は、比較的裕福な白人にも拡大。若年層での被害も深刻だった。

「米国では学校で行われるスポーツもオピオイドが処方されていました。そして大勢の生徒が訪れる学校の指定医などが、製薬会社に取り込まれてオピ

ずれも医師の診断をもとに処方される処方薬。そして両国の問題の背景には類似した社会状況も見て取れる。本稿ではそうした日米の処方薬依存の現状を、有識者の声をもとに紐解いていく。

まずは米国のオピオイド危機について。米国は各州での合法化を巡り議論が続く大麻(マリファナ)をはじめ、ドラッグと日常との距離が日本以上に近い国だが、近年のオピオイド危機ではなぜ問題が大きくなつたのか。

今年に日本で発売された書籍『DOPESICK』(アメリカを蝕むオピオイド危機)(ベス・メイシー著/光文社)の訳者で、自身もジャーナリストとしてオピオイド問題を追いかけてきた本誌連載陣のひとり、神保哲生氏に話を聞いた。

「米国に依存性のある薬物が蔓延し、依存症者が大量に出た時期は過去にもありました。南北戦争時に流行したのも、オピオイドの一種であるモルヒネです。そして近年のオピオイド危機については、鎮痛薬として処方されたオキシコンチンが入口となり、より濃度が高く、依存性の高いオピオイドが過剰摂取していたフェンタニルは、強力なオピオイドの代表例。その強さはモルヒネの50~100倍とされています。そして近年は、フェンタニルのさらに100倍の効力を持つカルフェンタニルも中国などから米国へ流入。オンラインで

たとえば16年に亡くなったプリンスが過剰摂取して死んだのが代表例。その強さはモルヒネの50~100倍とされています。そして近年は、フェンタニルのさらに100倍の効力を持つカルフェンタニルも中国などから米国へ流入。オンラインで

た。」

「米国に依存性のある薬物が蔓延し、依存症者が大量に出た時期は過去にもありました。南北戦争時に流行したのも、オピオイドの一種であるモルヒネです。そして近年のオピオイド危機については、鎮痛薬として処方されたオキシコンチンが入口となり、より濃度が高く、依存性の高いオピオイドが過剰摂取していたフェンタニルは、強力なオピオイドの代表例。その強さはモルヒネの50~100倍とされています。そして近年は、フェンタニルのさらに100倍の効力を持つカルフェンタニルも中国などから米国へ流入。オンラインで

た。」

「米国に依存性のある薬物が蔓延し、依存症者が大量に出た時期は過去にもありました。南北戦争時に流行したのも、オピオイドの一種であるモルヒネです。そして近年のオピオイド危機については、鎮痛薬として処方されたオキシコンチンが入口となり、より濃度が高く、依存性の高いオピオイドが過剰摂取していたフェンタニルは、強



「ドラッグ」の教科書／「舐達麻」超大麻論／「ラップスター誕生」の未来

サ



今こそ知りたい“禁断の薬”

日米「大麻ビズ」最前線

「医療と麻薬」1万年史

「MDMA」の医学的研究

「宗教と麻薬」の関係ほか

頭に効く! ドラッグ新論

正論か極論か?

「たかが大麻

ガタガタぬかすな」

舐達麻がブチかます

コンプラ無視の大麻論

元「日本一可愛い高校一年生」

この春卒業の18歳

「吉田莉桜」の

お部屋グラビア

次なるビジネスは瞑想?

合法大麻でボロ儲け!

米国ラッパーのシノギ

栽培と流通を描いたマンガ!

『満州アヘンスクワッド』

著者が挑む“タブー”

世界一真面目な

「**ドラッグ**」の  
**教科書**